

無事最終試験に合格した白山が初めて辿り着いた金沢は、今まで過ごしていた信越線とは全く違う雰囲気で、改めて知らないところに来たのだという気分にはさせられた。

気を引き締めて、事務所の扉を引くと、暖かい空気に混ざったストーブの独特の匂いが鼻を掠めた。

白山を特急化する事を推し進めていたという上司が出迎える。その人に大まかな説明を受け、各箇所を案内されながら、この人が自分の上司になるのかと思うと内心溜息が出た。とてもではないが好きになれそうにもない。品定めするような視線、言葉の端々から滲む恩着せがましきなど、どうにも鼻について仕方がない。

一通り建物の中を見て回って、上の人たちが詰める部屋に連れてこられた。少し待っていないさい、という言葉に素直に硬いソファに座っていると、

「君の教育係を一人準備した。細かいところは彼に訊いてくれ」

と言われた。そしてその人がもうすぐここに来るのだとも。

教育係、と言っても同じルートを走るわけでもなく、単にここでのルールなどを教えてくれるだけの人だろう。信越線にいた頃

だつて何も勉強していなかったわけではない。それを知っている癖にわざわざ「教育係」などを付けてきた上司に改めてうんざりした。

部屋の入り口は白山が座っているところからは死角になつて見えない。その扉ががらりと引かれる音がして、その人がそちらを見た。

「おお、来たようだ。……はくたか、こちらへ」

上司が呼んだ名前にどきりと胸が鳴った。はくたか、と彼は言ったのだろうか。その名前を聞いただけで、今までの余裕は何処かへ吹き飛び、代わりに襲ってきた緊張の余りこちらへ近づいてくる男をまともに見ることが出来なくなつた。

それでも何とか立ち上がって、上司が見ている方を向く。僅か数メートルの距離にいたのは、紛れもなくはくたかその人だつた。電車の運転中ではないためか、眉間の皺が消えている代わりに全身を包む柔らかい雰囲気、一瞬白山に人違いかと思わせるほどに違つていたが、よく見ればやはり半年の間見つめ続けたはくたかだつた。

「今度のダイヤ改正から上野と金沢を結ぶ『白山』だ。君を教育係に任命するから、後は宜しく頼む」

上から口早に新しい任務を告げられたはくたかは、戸惑った表情で目の前の白山と上司を交互に見た。

宜しく頼むよ、とはくたかの肩を軽く叩くと、上司はさつきと離

れていった。やっぱりこの人のことは好きになれそうもない、と遠ざかっていく背中を見ながら思った。そしてすぐに白山は目の前のはくたかに向き直った。相変わらず困った顔をして白山を見ていたはくたかだったが、ハツとしたように姿勢を正すと、

「えっと……その、白山？私のはくたかです。どうやら君の教育係らしいので……これからよろしく」

「はくたか先輩、宜しくお願ひします」

困惑した表情のはくたかと対照的に、白山は満面の笑みを浮かべながら挨拶をした。

これが、はくたかと白山が交わした最初の言葉だった。

「僕は信越本線経由で上野と金沢を結びます。先輩とは高崎と直江津で分岐する形ですね」

「そうなんだ。全く、あの人もそれならそうときちんと言つて欲しいよ……教育係だって、さっき聞いたばかりなのに」

白山の事について、何も説明を受けていなかったというはくたかに同情する。自分だつて突然呼び出されて、見たことも無い人の教育係になれと言われても困ることくらい簡単に想像がつくのだから。

それでも、真面目なはくたかは教育係としての任務を全うしよう

と、まずはここでのルールを教えることにしたらしい。上司の執務室から拝借した予備の規則集を手にしたはくたかの後ろに続いて、近くの部屋に入った。簡単な机と、ソファが置かれた十畳ほどのその部屋は、普段特急達の休憩室として使われているとのことだった。

「そこに座つて」

指示された通りに机の前に置かれた椅子に座ると、その向かいにはくたかが座つた。

規則集を広げて一通りの勤務規則を説明される。訓練ばかりだった頃と比べて、特急として走り始めると必然的にやることも増えるようだ。毎日の運転日報はもちろん、車両や線路、架線の状態で気づいたことがあればくまなく伝えるようにする、など、気をつけるべきところが格段に増えることに驚く。特に車両については、白山のために造られた新型ということもあり、何も言わなくても毎日整備員が事細かく確認をしてくれる、という状況が当たり前だと思っていたから、他の特急が皆自分の車両を気に掛けている、という事を初めて知った。

「——あとは……君は特急だから、部屋に風呂場はあると思う。ただし狭いから、他の人からは不評だね。一階にある大浴場は二十四時間入れるから、そちらの利用者の方が多い。あと、洗濯は自分で出来るものは自分で。制服のように水洗い出来ないものは管理人さんに預けるとクリーニングに出してくれる」

## 白き名にもつものたちの寓話

「なるほど」

「宿舎の話はこんな所かな。何か質問は？」

「特にありません」

「そう。まあ、実際に行ってみないことには分からないだろうしね。後で案内するよ。荷物も届いているだろうから」

次は、と規則集のページを捲るはくたかの指に視線が行った。どちらの手にも指輪の類はしていない。細くて長い指がせわしなく動いているのを見ながら、白山は込み上げてくる想いを押さえる事のできっぱいだった。

あこがれていた人が、目の前で指導してくれている。はくたかを教育係としてくれた事だけは、あの上司に感謝したいと思った。

「……ああ、あつた。福利厚生とか……いいかな？それとも、この中を見に行こうか」

「そうですね。ここは広いので迷ってしまいそうです」

まだ営業運転が始まらないなら、勉強する時間はあるね、と言ってはくたかは規則集を閉じた。まずは宿舎から、と二人は休憩室を出る。二時間はいたはずだが、その間他の誰もここに来なかったのは、単に忙しいからかそれとも他に理由があるのか。この時の白山には分からなかった。

宿舎は駅から少し離れたところにあつた。木造のそれは三階建てで左右に同じ数だけ部屋が並んでいるようだった。磨りガラスのはめられた扉を開けて中に入ると、右手に管理人室、左手にロビー。

テレビなんかはここで見るんだよ、とはくたかが教えてくれることに一つ一つ頷きながら、辺りをぐるりと見渡した。

次々と設備を案内されながら後ろからずつとはくたかを見ていた。前から色白の肌だと思っていたが、改めてその白さに驚かされる。濃紺の制服の襟と、首に掛かる髪の毛の隙間から覗く白い肌心がざわつくのを感じながらも、白山は黙ってその後を追った。

案内された白山の部屋ははくたかの部屋のちょうど反対側だった。こればかりは割り当てだから仕方ない、と分かっている、やはり少し残念だ。

「木造だから足音が響くんだよ。夜中とかでも夜行列車たちが平気で動き回っているから、しばらくは気になるかもしれないな。端だからそこまで酷くないとは思うけど」

私も何度か夜中にたたき起こされたことがあるんだと肩を竦めてみせるはくたかに、白山は思わず吹き出した。案外可愛いところがあるのだと白山は思う。顔を合わせてからたった数時間しか経っていないというのに、姿を追い続けた半年間で得たものとは比べものにならないくらい、はくたかの事を知ることが出来ていた。

無理を通して金沢に来て良かった、と心の底から思った。

通常の日勤時間帯の終わりを告げる鐘の音が鳴り響く中、二人は

再び事務所のある建物の中にいた。一通り説明し終えたはくたかは、今日はこの辺にしておこうかと白山に声を掛ける。

頭の中で今日伝えたことに漏れがないか確認しながら、「今日はこれくらいにしておこうか。これまでの事で、何か質問はある?」

「一つ、いいですか」  
「どうぞ」

白山はぎゅつと右手を握りしめて、はくたかを見据える。

ずっと聞きたかったことがあった。その返事次第では、今後の行動も考えなければならぬくらい、白山にとつて重要なことだ——頭の片隅ではこの場で聞く必要はないということくらい分かっていたが、この一日ではくたかの魅力をたくさん知ってしまった白山には、どうしても今聞いておきたかった。

「先輩は、付き合っている人とかいますか?その、恋人とか」

「……え?」

にこり、と完成された笑みを浮かべた白山に対して、予想外の、業務と全く関係のない質問をされたはくたかは、驚いた表情で白山を見ていた。驚きのあまり喉から出てこない声の代わりに、口をばくばくさせて、一体何を言っているんだと全身で訴えている。

「質問の意味が、よく分からないんだけど。それは、業務上の……」  
「だから、先輩には付き合っている人がいますか、と聞いたんです」

分かりきったことを再度尋ねてくるはくたかに、少しいらついた。こっちは真剣なのだ。半年間温め続けた想いが成就する可能性があるかどうかを知りたいだけだ。そして、可能性が無いのなら、これ以上好きになる前に諦めてしまいたいと思う。

突然、ぱしつと鋭い音がして、左の頬が熱くなった。一瞬何が起きたのか分からず、恐る恐る左頬に手をやると、そこは熱を持って少し腫れているようだった。

目の前のはくたかは、右手を左手で握りしめて俯いている。それを見た白山は、ああ、自分は殴られたのだ、とようやくこの状況を理解した。

頬が腫れたのは白山の方なのに、まるで自分が傷ついたかのような顔をするはくたかを見て、白山はようやく冷静になれた。そして、いかに自分が身勝手で、自分の事しか考えていなかったのか、ということに悟る。はくたかに出会えた嬉しさ——一種の熱病に近い——に踊らされて、うかつなことをしてしまったと後悔しても、もう遅い。

「すまない、私は」

「いえ、こちらこそ突然おかしな事を訊いてしまい、すみませんでした。今の質問は忘れてください」

「白山」

自分の名前を呼ぶ声が、心に染み渡る。いたたまれなくて、白山はくると踵を返すと、はくたかに背を向けて廊下を早足で歩いて

## 白を名にもつものたちの寓話

いく。後ろからはくたかが明日の集合時間を教えてくれたが、とても振り返る勇氣はなく、分かりましたとだけ返事をして黙々と歩き続けた。少しでも早く、この情けない姿をはくたかの前から消してしまいたかった。

先ほど教えてもらったばかりの宿舎に戻り、真新しい鍵を鍵穴に差し込む。まだ自分の物がない部屋はどこか肌寒かった。部屋の隅に積まれた段ボール二つが白山の荷物だ。夕食には少々早い時間で、他にやることもなかったので段ボール箱を開封することにした。

何冊かの本と、最低限の衣類。これからどれくらいの間ここにいるかは分からないが、そのうち物は増えるのだろう。そういえば生活に必要な物はどこで買えばいいのか訊くのをお忘れだ、と思った途端、全てが面倒になってベッドの上にごろりと横になった。

完全に失敗だ。明日からはくたかにどんな顔をして会えばいいのか分からなかった。これからずっと一緒にいられると思ったのに、自分からその場所を壊してしまうような事をしてしまった。募ってばかりの想いを少しでも早く吐き出してしまいたかったのも、全ては自分の都合だ。

「僕は、最低だ」  
ここにエフがいたら、彼もそう言うだろう。お前は馬鹿で最低だ、と。

エフの顔に続いて軽井沢での訓練を思い出した途端、懐かしさで胸がいつぱいになった。あの場所を離れて数日も経っていないと

いうのに、もう帰りたくなかった。

扉の向こう側から、微かに人の声がする。そろそろ他の特急たちも帰って来る頃なのだろう。端にある白山の部屋までやって来る者はいないが、知り合い同士で話している様子が、まだ金沢に知り合いがない白山にとっても羨ましかった。

それからまた静かになって、白山はそつと扉を開けて廊下を覗き見た。小さな電球が等間隔に埋め込まれた廊下は薄暗く、一番奥など真つ暗で何も見えない。恐る恐るといった様子で部屋から出て、ゆつくりと歩いてみる。時々みしり、と床が鳴るのを聞いて、はくたかが足音が響くと言っていたことを思い出した。

途中誰ともすれ違わなかった。中央にある階段の前を通り過ぎ、反対側に並ぶ部屋の前を歩いていく。ネームプレートに掛けられた名前は知らないものも多く、どれだけ多くの特急がここにいるのかと溜息が出る。

一番奥の、はくたかの部屋の前まで来ると、控えめに扉をノックした。コツコツ、と二度鳴らして様子を伺うが、一向に反応がない。もう一度同じようにノックしてもやはり反応がないところを見ると、もう眠っているのか、それとも外出してしまったのか。

少し残念に思いながらも、どこか安堵している自分がいた。ノックはしたものの、もしはくたかがいたら何を話せばいいのか、まだ考えていなかったのだから。でも、これで話す事を考える時間が出来た、と思う。

突き当たりに作り付けられている窓枠に腰を預けて、溜息を一つ吐く。はくたかが帰ってくるのを少し待ってみることにした。

ガラスを通して冷たい空気が建物の中に流れ込んできていた。軽井沢ほどではなくても、ここも十分寒い。外にはまだ雪が積もっていたし、車を通る度に遠くから凍った雪を砕く音が聞こえてくる。しんしんと冷える中、ただはくたかの帰りを待つ。何度か上着を取りに戻ろうかとも考えたが、その間にはくたかが帰ってくるかも知れないと考えると、どうしてもその場所から動くことが出来なかった。

時々近くの部屋の住人が戻ってきては、怪訝そうな顔をして白山の方を見たが、ここに来て初日の事、顔も割れていないし、街灯の明かりが差し込む窓を背にしているせいで、顔が影になつて誰なのか判別もつかないだろうから、気にしないことにする。

懐中時計を持つてくるのを忘れたから、今が何時で自分が何時間こうしているかも分からなくなっていた。夕食を食べ損ねたはずなのに、不思議と空腹感はなかった。目を閉じて、冷たくなった手を交互に温めながら白山はずっと考えていた。はくたかがここに戻ってきたら、何と言えればいいのか、と。

冷え切った指先の感覚が怪しくなつてきた頃、誰かが階段を上つてくる音が聞こえた。落ちかけていた意識を引き戻して、踊り場に続く方向を見ると、姿を現したのは白山が待ち焦がれていた、はくたかだった。

ゆつくりとこちらに近づいてくるはくたかに声を掛ける。びくりとはくたかの身体が揺れて、長く息を吐き出す音が聞こえた。

「……その声は、白山、か？」

「はい」

上手く声が出ない。数時間黙つたままだつたせいだろうか。

「どうしてここに？」

「昼間の事を謝りたくて、待っていました」

震える声を絞り出すようにして質問に答える。心臓の鼓動が自然と早くなつていく。まるで、新しい傷を自分で抉るような行為だと思つたが、ぐつと耐える。ここで逃げるわけにはいかないと自分に言い聞かせて。

「いつから？いつからここにいるんだ」

「帰ってきてから、ずっと……今、何時ですか。時計を、部屋に忘れてきてしまつて……」

はくたかが懐中時計を取り出し、時間を確認する。そして、驚いた顔を白山の方に向けた。

「——つ、君は、馬鹿だ。こんな寒い中ずっと廊下にいれば、風邪を引くことくらい分かるだろう」

目を逸らして、自分を罵るはくたかを見て、胸が詰まった。はくたかにこんな表情をさせるために、あんな事を訊いたんじゃない。

「自分でもそう思います」

駄目だ、と誰かが叫んだ気がした。が、一度動き出した身体と心

は簡単には止めることが出来ない。一歩足を踏み出した途端、ぎしり、と床が軋む。それはまるで白山の行動を咎めているようだったが、構わずもう一歩踏み出し、手を伸ばせば簡単に触れられる距離まで近づくと、伸ばした腕で力一杯はくたかを抱き寄せた。

「何をする！」

今、自分が置かれている状況をようやく把握したらしいはくたかは、その腕から逃れようと必死に白山の身体を押し返してくるが、白山とて一度手にした温もりをそう易々と手放すわけにはいかない。

「……好きなんです」

自分の腕の中にあるはくたかの耳元に口を寄せ、呟くようにその言葉を口にした。ぴたり、とはくたかの動きが止まる。それを良いことに、白山は言葉を続けた。

「あなたのことを、ずっと前から……尊敬していました」

「離してくれ、白山」

抵抗する力が徐々に弱くなる。押し返す手に前ほど力が籠もっていない。形ばかりの抵抗になるのは時間の問題だろう。

「早くあなたに会いたくて、無理を言っただけでも早くここ、金沢に配属してもらったんです」

「私は、私は君のことなんか知らない」

「あなたが僕のことを知らないのは当たり前です。でも、僕は知っています。あなたが上越線を駆ける姿を。直江津駅で駅員に向ける

笑顔を。そして、誰よりも自分に誇りをもっていることを」

「やめてくれ……私はそんな人間じゃない……大勢いる中の一特急にすぎない……」

「そんなあなただから、好きになったんです。他の誰でもない、あなただから」

白山が言葉を重ねる度に、はくたかは頭を横に振ってその言葉を否定しようとする。もはや白山の胸を押し返す手に力はなく、声には困惑が色濃く滲んでいる。

「……だから、恋人がいるか訊きたかった。あなたのことが好きだけど、もし既に決まった相手がいるのであれば、僕は身を引くしかない。あなたの幸せを奪ってまで、自分が幸せになりたいとは思わないから」

自分でそう言いながら、白山は自分の吐いた嘘に笑い出しそうになった。この行動は、全て自分が幸せになりたいがための行動だというのに、はくたかに対して見栄を張ってどうする、と。今更そんなことを言っても滑稽なだけだ。

「でも、でも……駄目でした。あなたが僕の名前を呼んでくれるだけで、嬉しくてどうにかなってしまうそうだった。昼間はずつと、その事を隠すことで、必死だったんです」

「何を言っているのか、分からない……」

嫌々と、頭を振るはくたかを見て、白山は腕を解いた。これ以上この人を腕の中に留めておく理由が無かった。はくたかにはずつ

と笑っていて欲しいのに、どうして苦しめるような事ばかりを  
てしまうのかと、酷い自己嫌悪に陥る。

「ごめんなさい、またあなたを困らせてしまった」

顔を上げず、俯くはくたかの前で、白山もまた顔を俯ける。お互  
い言葉を発せず、ただ相手の気配だけを探るようにして何か言われ  
るのを待っていた。

「すまなかった」

沈黙を破ったのははくたかだった。その口から発せられた謝罪  
の言葉に白山の胸は締め付けられたように痛んだ。断られても仕方  
がないと思っていたのに、やはりこうして目の前に突きつけられ  
ると、辛い。

「……昼間、君に平手打ちして、ごめん。悪かったと思っている。  
でも、私には、君が言っていることが信じられないんだ。言っ  
ていることは分かるけど、その、突然好きだとか言われても、私を  
からかっているとしか思えない」

「そんな。僕は、真剣です」

「その真剣だという言葉だって、私には信じられない」

「では、どうすれば信じてもらえますか」

はくたかは、ポケットから自室の鍵を取り出すと、白山の前から  
自室のドアの前に移動した。鍵穴にそれを差し込んで回すと、カチ  
リと鍵の外れる音がする。それは、この会話の終了を告げる音だっ  
た。

「……君が言っていることが本当かどうかは、今後の君の行動を見  
て、判断したい……それでも、いいかな」

「もちろんです。宜しく願います……!」

白山は深々と頭を下げた。そんな白山に対して、はくたかはただ  
一言、うん、とだけ言い残して、自室へ入っていく。そして、扉  
が閉まる直前、おやすみ、明日も頑張ろうな、と白山に言ってくれ  
た。

ぱたんと目の前で閉じられた扉をじつと見つめて、白山は長い溜  
息を吐き出した。今になって足が震えてくる。気を抜けばその場に  
座り込んでしまいそうになるのを何とか耐えて、よろよろと自室  
に向かつて歩き出した。

僅かながら希望を残してもらったことに感謝しながら、白山はぐ  
つと手を握りしめた。今後の行動次第で認めてくれるというのなら  
ば、今の白山に出来ることは、早く一人前になって認めてもらうだ  
けだ。

「よしっ」

はくたかを待つ間に感じた寒さも、もう何も感じなかった。北  
陸特有の凍った雪が窓ガラスに当たって音を立てるのを聞きなが  
ら、白山は心にあつた大きな氷塊がゆつくりと溶け出していくのを  
感じていた。